

い、念じ、絶対帰依の念を捧げるのであるが、この行がこのようなして生じ来るのは、全く、彌陀の限りない慈悲力によるのである。

入唐求法礼行記に見る円仁長安 在中の仏教について

林 照 秀

慈覚大師円仁は日本天台宗の人で、大同三年出家、伝教大師を師に持ち十五才の時に師の門に入る。承和五年に遣唐使藤原常嗣に従つて入唐し、開成三年揚州府に至り、到諸道、遍謁名徳、受学顕密。をし、承和十四年九月帰朝す。この入唐した時の旅行記が入唐求法巡礼行記で四巻からなっている。

旅行記を開くと承和五年六月十三日より筆がとられ、長安には開成五年八月二十日から会昌五年五月十五日まで滞在している。この滞在中円仁は、中国仏教史上有名な三武一宗の法難として誰れにでも知られている。唐武

宗の廃仏に出逢い身を持つて体験し、その惨状を親しく見て仏教の状況を細かく記している。

では武宗の廃仏に関係あると見られる初の記事は、「入唐求法巡礼行記」才三卷会昌元年六月十一日の条である。

この月の今上誕生日は慣例によつて内裏で僧・道士供養を受け、両教代表で教義討論がなされ道士二人は紫衣を賜わり、僧は一人も賜わらなかった。又南天竺の宝月三蔵、帝に直接帰国許可願をさしだしたのを越官罪に問ひ、三蔵の弟子達は棒で打たれ三蔵は帰国を許されず。

このように、帝の仏教攻撃がなされてきたようである。

翌年三月三日には「李宰相聞奏僧尼条疏勅下、発遣保外無名僧不許置童子沙彌」と、宰相の僧尼整理案提出により現状以上に僧尼増加の出来ぬようにした。六月の今上誕生節の宮廷における僧、道の御前講義にも、道士のみ紫衣を賜わる。

十月の勅では、呪術や身上杖痕など前過者のしるしのある僧、戒行を修せない者すべて還俗させよ。又「若僧尼有錢物及穀斗田地庄園收納官、如惜錢財情

願還俗、玄亦任勸還俗、充入兩稅徭役。」と命じている。

翌年一月迄に長安の左右街功德使によつて調査され、年令老衰した者、戒行精進なる者を除いて、資材を愛惜して自ら還俗した者は、左街功德使管下では一二三二人、右街功德使管下では二二五九人と報告。円仁がいた資聖寺のみでも三十七人が還俗。このように真の求道心にて出家していいないものがずいぶんあつたことがわかる。この還俗者は再び寺に入ることを得ず。又保外に追放した僧尼は京に入つて住居することを許さず。と二月に勅がでている。

円仁は会昌二年三月十二日の条に、長安城中の回鶻族数百人を斬殺する勅令がでて、尚諸州府でも同様によと、発布せられたと書いている。これは回鶻族が中国の北境に侵入し、戦いが以前よりあり、北方からの回鶻の脅威は長安には安心できるものではなかつたからである。

会昌三年四月の勅にて国中のマニ教の僧が、剃髪され袈沙をつけ沙門の形にて殺されている。これは回鶻がマニ教を奉じていたからで、沙門の形にして殺したのは仏

教に対する憎悪のためだろう。

河北道潞府節度使劉建簡の判乱にて、長安にいた潞府の役人を捕えようとしたけれど逃亡され、その隠れ場所が寺との報道により、帝は城中は云うまでもなく、全国の寺に僧の公式に登録せられていない者全部を還俗させ、新僧は尽く捕え長安に送つて殺した。殺された新僧は三百余人に達している。

会昌四年正月には、三長齋月に殺生を禁じていた法令が、三月月に殺生を禁じるとされた。これは従来仏教が作つた三齋月を道教による三月月にかえたのであり、帝の道教への偏信が強力になつてきた。

三月には仏牙供養が蔽禁、又山西五台山、泗州普光寺、長安終南山の五台、鳳翔法門寺等の巡礼を禁止、「今後一切これらに一銭の布施をしたものも、僧尼にてこれを受けたものも、杖二十に処す。これは右の四処に先の潞府の役人が隠れているかもしれないからで、ここに行く僧で公式証明書のない者は見つけ次第直ちに殺してしまえ。」という強烈な勅である。

宮廷の道教道場では四月から約三月半迄、潞府の討伐

の成功を祈る祭りが道士によつて続けられ、宮中に従前から安置されていた仏像は毀たれ、仏経は焼かれ、念持僧は追い出され、代つて天尊老君像が祭られた。

六月の皇帝誕生日には僧は一人も招かれず、道士のみ招かれた。

そしてついに七月に仏寺廃毀の実動になり、全国の山房蘭若、普通院、仏堂、齋堂等、民間の集まる小仏堂にて二百間未満の公式寺額のないもの毀ち、その僧尼を還俗させ、徭役に充てた。長安城内でも三万余の仏堂が大方大寺に匹敵する立派なものだつたが毀され、尊勝陀羅尼の石幢、僧墓など又折せられた。

会昌五年三月三日、仏寺は莊園を置くことを許さず。寺有の奴婢及び寺舎の財産を検察せしめ、仏寺の経済的根拠を破壊しさうとしている。

長安の寺の奴婢は三等に分ち、諸寺の錢物、奴婢貨売の錢は全て官に没収した。又僧尼四十才以下、還俗せしめ、数日後、五十才以下の全ての僧尼、五十才以上でも祠部牒なき者全部を還俗せしめると命ぜられ、仏教界は大恐慌となつた。長安では四月一日から十五日迄四十才

以下の僧尼を還俗させ、十六日から五月十日迄五十才以下の僧尼を還俗させ、十一日から五十才以上の無祠部牒者を還俗さす、というもののその牒に少しでも汚点あるものは容赦なく還俗せしめる厳しさを極めた。そしてついに、外国僧も唐の度牒なき者は還俗させて本国に帰すこととなり、円仁も度牒なきため、還俗者として長安から強制帰国の途につかざるを得なくなり、五月十五日俗衣にて密かに城中を出でて帰国の途についたのである。このように仏教攻撃はまだ続くが、枚数の制限もあり、充分述べられないけれども大体以上で円仁長安在中の仏教状況がわかると思う。

即ち、会昌元年から五年間、じよじよに仏寺、仏像、經典等を毀され、うずめられ、焼かれ、僧尼はほとんど還俗させられ、又殺されもして徹底した仏教攻撃であつたのである。

では最後に、この原因を一、二述べると、帝の道教信仰。寺塔の造立。国家的仏教行事の国費負担、徭役免除の僧尼と仏寺領有の土地増加等の国家財政の貧窮、僧尼の墜落の仏教々団自体の宗教的主体制の失いつつあつたところにある。